

# ラテンアメリカ都市物語

＝第26回＝

## ハバナ —アンティリヤスの真珠

山岡 加奈子 (アジア経済研究所 主任研究員)

キューバの首都ハバナは1519年にスペイン人によって建設された。海流と貿易風の関係で、ガレオン船の艦隊がスペインと新大陸を往復するために、もっとも近いのがカリブ海地域であり、現在とは比較にならないほどの地政学的重要性があった。コロンブスが最初に「発見」したのがカリブ海の島々であったのも、スペインから出航すると一番到達しやすい地域だったためである。

キューバ島はカリブ海で最大の島であるが、スペイン人が新大陸で集めた金銀財宝を本国に運ぶために、積み荷の最後の集結地として選ばれたのがハバナであった。ハバナ湾はガレオン船が陸地近くまで停泊できる水深があった。また英国やフランスの政府が送り込んだ海賊や私掠船の襲撃を避けるため、夜間に船を集めて港を閉鎖することができる地形を持っていたのである。

ハバナ港は下記地図の右上に、ハバナ湾から内側

に入り込んだ入り江がある。入り江の入り口は大変狭くなっており、この入り口の両側の岬にそれぞれ要塞を建設し、海賊の襲撃を見張ることができた。入り江の西側には入り口近くにプンタ要塞、内陸側にフェルサ要塞の2基がそれぞれ16世紀に建設され、東側にはモロ要塞が16世紀に、18世紀にはさらにラ・カバーニャ要塞が建設された。

ガレオン船は夜9時までこの入り江の中に退避し、9時になると入り江の狭い入り口は両側から太い鎖が渡されて、それ以上船が通れないように閉鎖した。これによって、新大陸じゅうから集められた金銀を海賊の襲撃から守ったのである。

現在に至るまで、ラ・カバーニャ要塞では毎晩9時になると、「9時の号砲 (Cañonazo a las Nueve)」と呼ばれる儀式が行われる。午後9時少し前に、暗闇の中、当時のコスチューム (スペインというよりフランスの宮廷で着用されていた服装に見える。白



図 ハバナ市中心部  
出所: <https://www.orangesmile.com/travelguide/havana/high-resolution-maps.htm>



入り江の西側に立つプンタ要塞 (写真はいずれも筆者撮影)

いかつらをかぶり、金モールのついた赤いジャケット、白いパンツに黒ブーツ）を着た兵士たちが数名、独特の節回しで「静粛に（シレーンシオー！）」と呼びわりながら行進してきて、要塞の上部に据え付けられた大砲に点火して号砲を1発鳴らす。この9時の号砲を合図に港は閉鎖されていたのである。現在は半ば観光イベントであるが、嵐の日も一日も休まずに続けられている。

キューバには9か所のユネスコ世界遺産があるが、1982年にキューバ初の世界遺産となったのが、ハバナ旧市街である。ハバナの街は上記の港とその周辺から始まった。カテドラル広場（ハバナ聖堂を囲む）をはじめとした4つの広場が建設され、その周囲に修道院や商店、住宅が建設されていった。キューバ革命後、革命政権はハバナ市以外の開発を優先し、ハバナのインフラのメンテナンスは相当に不足することになった。旧市街は荒れるに任され、1994～96年に筆者がハバナに住んでいたとき、世界遺産に登録されて10年以上経過するにもかかわらず、貴重な古い住宅はハバナ以外の地域からの国内移民が違法に増築するためにますます傷み、雨が降るたびに旧市街の建物が1棟は崩壊するという状況だった。1990年代から、ユネスコとキューバ政府の財政支援を得て旧市街の修復が進められた。筆者が住んでいたころは遺跡にしか見えなかった旧市街は、2010年代になり修復が進むと見違えるようになり、石畳の狭い通路が碁盤の目のように走り、両側の建物もかつての輝きを取り戻した。旧市街の観光収入を修復費用に充てる方式で、目抜き通りのオビスポ通りには両側に革命前の英語名を持つレトロなデザインの

店舗が立ち並び、インテリアや家具、衣料品などの外国人観光客向けの商品を外貨建てで販売している。その利益の一部がさらに修復費用に充てられるという循環である。

ハバナ旧市街は、主として16～18世紀に港から西へ広がっていった地域を指す。旧市街の最後の境界線は、パリのシャンゼリゼ通りを模して造られたプラド大通りだが、この美しい通りは海岸沿いのマレコン（海岸）大通りから、旧国会議事堂（カピトリオ）まで続いている。米国の連邦議会にそっくり（ただし横幅は米国のものより短く、高さは米国より高い）のこの元国会議事堂は、革命後は科学アカデミーとなり、ソ連崩壊後は博物館として模様替えされた。

ハバナ新市街は、19世紀から20世紀前半に、旧市街からさらに西へ開発が進むにつれて形成された。商業地区のセントロ・アバナ地区、19世紀の富裕層のコロニアル様式の屋敷が立ち並び、ハバナ大学や革命広場（革命前は市民広場と呼ばれた）があるベダド地区、20世紀に米国の都市区画が取り入れられた高級住宅街のミラマール地区が、観光ガイドでよく紹介される中心街である。

これらの富裕な地区はハバナ湾に沿って、海岸に近い場所に形成され、これらの地区を囲むように内陸側に中間層向けの住宅地や大衆居住地区が形成されている。一般に海（何しろここはカリブ海である）の近くに住むことがステイタスシンボルと考えられている。同時に海の近くは塩害を受けやすく、建物の手入れに通常より費用がかかる。ハリケーンが来ようものなら、高波がマレコン大通りの防波堤を越えて押し寄せ、住宅が浸水する場合もある。それでも、



入り江の東側に立つラ・カバニャ要塞。この日はハバナ・ブックフェアで多数の市民が訪れていた（2014年）



マレコン大通り。旧市街を抜けて新市街へ向かうルートの一つ



写真上は19世紀、つまり独立前に建てられた旧国会議事堂、撮影時の2018年はキューボラ部分は修復中、下は20世紀初頭、独立直後に建設された大統領宮殿で、革命後は革命博物館となった

海の近くに住む人たちは、ハリケーンが通り過ぎるとまた自宅をきれいに掃除し、来客を迎え入れるのである。

観光客が目にするこれらの壮麗な建築物は、ハバナの住民の生活に少し潤いを与えている。革命後多くの富裕層の住宅は接収されて政府の事務所になったので、用事があれば誰でも中に入れる。海外から輸入された白い大理石が使われた、コロニアルな円柱が立ち並ぶ入り口を入ると、両側に大理石の彫刻が置かれ、壁にはイベリア半島かイタリアから輸入された美しい絵のついたタイルがはめ込まれている。

ただし、これらのお屋敷は維持費が非常にかかる。観光地になっている旧国会議事堂や博物館はともかく、政府の事務所は手入れが行き届いていない。外壁を白や他の美しい色で塗るのだが、そのための塗料は不足している。建物内部も水性塗料を定期的に塗らないとすぐ剥げてくるが、これらは今のところすべて外貨で輸入されているので、やはりそんなに頻繁に使えない。

ところがこれらの建物が少数ながら外資に売られることがある。するとあっという間に外壁は新品のように美しく光り輝き、ハバナの通りをフォトジェニックに変える。が、同時に中には自由に入れなくなる。あちら立てればこちらが立たぬ、という好例である。

ここまでハバナの外に見せる顔を述べてきたが、こういう観光客受けする部分はハバナのきれいな部分である。普通の市民はこういう外向けの顔を自分のために使うことはできない。たとえば旧市街には今も上水道が通っていない。違法建築を行って、ハバナ以外の地域から移民してきた人たちを含め、旧市街の住民は毎日やってくる給水車（ピポと呼ばれる）の前からのタンクをもって列を作る。旧市街の建物は同時期に形成されたスペインの都市の旧市街によく似ていて、狭い石畳の道の両側にあり、暑さを避けるために高い天井を持つ2階建てなのだが、高い天井のある1階分を横に2つに仕切って2階分にしてしまう。つまり中に入ると2階建てが4階建てになっている建物も多い。そこに重い水タンクを抱えて毎日階段を上るのである。

上水道が通っている他の地域でも、革命後水の供給は1日おきである。革命前はもちろん毎日水は来ていたが、水道管をきちんと交換しないため、上水の半量は、ぼろぼろになった水道管から漏れ出してしまう。このため上水が来るのは1日おきになってしまった。水が来る日に1階部分に設置されたモーターで水を2階以上まで上げる。キューバ人の住宅には大きな水タンクが据え付けられていて、モーターで上げられた水をそこに貯蔵する。翌日水のない日はこのタンクの水を使う。永久に使えるとはいえない水タンクの買い替えも頭痛の種で、十分なサイズの水タンクを入手できない場合は、水の来ない日の水消費を抑えないと、夜には水がなくなってしまう。

ハバナ市内の移動手段も市民の頭痛の種である。自動車が発明される前に建設された旧市街は道が狭いが、他の地域はとくに米国の影響を受け、自動車移動することが前提の都市構造になっている。旧市街から新市街のベダドを抜け、ミラマールまでまっすぐ車で走っても端から端まで40キロメートルある。革命前は市内を数社あるバス会社の路線網が張り巡らされ、数分ごとにバスが来るので移動に問題はなかったそうだが、革命後バス会社がすべて接収されて事態は一変した。



ミラマール地区の病院前でバスを待つ人々。昼間なのでまばらだが、朝夕の通勤時間になるとこの10倍は人がいる

ミラマール地区に住む大学の先生が、約10～15キロ離れた隣のベダド地区にあるハバナ大学まで通勤するだけでも、2、3時間は待たなければならないバスをつかまえる必要がある。通勤先が旧市街だと最低でも1回はバスを乗り換えるので、オフィスに到着するために通勤時間が片道6時間になることも珍しくない。米国からの親族送金などで外貨収入がある人は、自営業者の乗り合いタクシーを使う。これなら通勤時間は市内どこでも1時間かからない。が、普通の公務員が毎日乗り合いタクシーを使うと、それだけで1か月の給料が吹っ飛ぶ。コロナ禍でキューバでも在宅勤務が一般的になったが（ただしインターネットは使えない家も多い）、ほとんどの労働者はこれを歓迎しているのではないか。

コロナ流行後、キューバには頼みの外国人観光客が来られなくなった。とくにハバナ市ではカサ・パルティクルと呼ばれる民泊が急増していたが、一気に商売ができなくなった。政府の外貨収入も急減し、輸入に頼る消費物資が買えなくなった。モノ不足は深刻で、ソ連崩壊直後の経済危機の再来と言われている。ハバナの住民は、キューバでもっとも海外に親戚がいる割合が高く、外貨送金も受けられる。しかし米中対立が深まるにつれて、米国は中国との関係を強化するキューバに対する警戒を強め、親族送金にも制限をかけている。経済危機に慣れているとはいえ、30年たつてまた同じような経済的な困難を味わうことになったことへの絶望感は想像に難くない。ハバナ市では現在、市内の住宅が数多く売りに出されている。1980年以来最大規模の移民ラッシュが起きているからだ。米国に移住するため、ハバナに住んでいる人が自宅を売りに出しているのである。美しさを取り戻しかけていたハバナの街も、このコロナ禍のモノ不足の中で再びくすみ始めているだろう。しかしそれでも私は、ハバナは中南米一美しい都市だと思っている。キューバ人以外は誰も同意してくれないが。

(やまおか かなこ 独立行政法人日本貿易振興機構 [ジェトロ]  
アジア経済研究所 主任研究員)

## ラテンアメリカ参考図書案内

### 『日本からみた世界の食文化 —食の多様性を受け入れる』

鈴木 志保子編著 第一出版

2021年11月 302頁 3,500円+税 ISBN978-4-8041-1440-8

「第Ⅰ章 日本の食文化」に続けて「第Ⅱ章 世界の食文化」の中で中東、欧州、アフリカとともに中南米編では7か国を取り上げ、「第Ⅲ章 思想・宗教、これからの食事・食生活」で構成されている食文化についての広範かつ多岐にわたるエッセイ的解説集。各国編はそれぞれの国の一般事情、食事、食法・マナー、食文化とその国の料理の基本テクニック、行事や習慣、Visit to 駐日大使館／各国料理店による代表的料理の紹介を載せている。編著者は神奈川県立保健福祉大学教授で、東京オリンピック時の選手村メニューアドバイザー委員会の副座長なども務めた。

メキシコはトルティージャやタコス、キューバは煮込み料理アヒアコなど、ジャマイカは焚き木の上で肉や海産物を焼くジャーク調理、ドミニカ共和国は伝統料理サンコチョ等、ブラジルは焼肉シュハスコと豆煮込み料理フェジョアータや重さで料金を払うブッフエ形式のポルキロ、ペルーは海産物のマリネであるセビーチェ等の料理と唐辛子やアンデス高地の穀物キヌアなどの食材、チリは南米各地でも食べられているミートパイのエンパナーダなどを写真とともに載せていて、関心のある国を拾い読みするだけでも実に楽しい。 (桜井 敏浩)





## 『コスタリカ伝説集』

エリアス・セレドン編 山中和樹訳 国書刊行会  
2022年5月 396頁 3,000円+税 ISBN978-4-336-07348-8

中米のコスタリカで昔から言い伝えられてきた伝説や民話集(コスタリカ国立大学出版局刊1995年版)を全訳したもので、鳥や火山などの自然についての「土地の伝承」31話、スペインの植民地にされキリスト教の影響も含めた「宗教伝説」17話や戦争で一度死んで蘇生したと語る男の話など「怪異譚」48話が収録されている。スペイン人征服者到来より遙か昔の伝承から、征服者やその後の海賊の襲来以降のコスタリカ人の血肉となっている伝説集大成の日本語による初めての紹介である。

1979年に青年海外協力隊員としてコスタリカ大学に派遣され、その後国際協力機構(JICA)教育専門家、新潟産業大学教授を務めた訳者が、コスタリカ人の夫人はじめ周囲の人たちの協力を得て訳出、日本での刊行にこぎ着けた労作。

(桜井 敏浩)



## 『帝国の動向 《フィクションのエル・ドラード》』

フェルナンド・デル・パソ 寺尾隆吉訳 水声社  
2022年1月 872頁 5,000円+税 ISBN978-4-8010-0547-1

メキシコの生粋のインディオから大統領となったベント・ファレスが、1861年に対外債務の支払い停止を宣言したことからフランス皇帝のナポレオン三世は軍隊を差し向け、1964年にオーストリア大公マクシミリアンをメキシコ皇帝に送り込んだ。同道したベルギー王女のシャルロット妃を主人公に、フランスの介入、帝政メキシコの成立の後を語らせている。フランスの撤兵による帝政維持の危機にシャルロットは欧州各地で支援を働きかけたが、次第に精神を病み、その間共和派の攻撃で帝国は崩壊、1867年にマクシミリアンは銃殺刑死した。シャルロットは母国のパウハウト城に幽閉され、生涯メキシコとファレスを恨み続け1927年に86歳で没したというのが史実だが、メキシコでのマクシミリアンとの日々の回想とパウハウト城でシャルロットが今は亡きマクシミリアンへ語りかける独白が交互に変わる構成で、大胆な憶測を交えた小説とグロテスクな史実それぞれの魅力を巧みに引き出している。

著者は1935年にメキシコ市で生まれ、2018年にグアダラハラで亡くなったメキシコを代表する作家。

(桜井 敏浩)



## 『カリブ海の黒い神々 -キューバ文化論序説』

越川 芳明 作品社  
2022年8月 345頁 2,700円+税 ISBN978-4-86182-926-0

1960年来米国と敵対しながら明るいイメージで思い浮かべることが多いキューバには、観光客の知らないアフロキューバの世界がある。スペイン系等欧州系と奴隷として連れて来られたアフリカ系、若干の先住民や中国系による混交文化がキューバのナショナル・アイデンティティであるにもかかわらず、黒人文化は白人支配層からも学界からも長く無視されてきた。著者は詩、絵画、映画から、宗教、逃亡奴隷、移民、そして製糖に至るまで縦横に論じ、アフリカ由来の宗教や文化に着目してその宗教がキューバという新天地で発展した過程、出身地域語族間での違いと与え合った影響、故郷を失ってしまったアフリカ系民たちの「ディアスポラ(離散)」を逃亡奴隷の子孫の哲学を考察することで探求し、あるカテゴリーに属する人は皆同じ本質を持っているという思想に異を唱える。さらに内部からアフロキューバ文化を観察するために、アフリカ由来の宗教サンテリアの司祭ババラウォの資格を取るまでの修行を体験し、そこから長く著者が関わってきたアメリカ文学との比較研究の事例として、『老人と海』を題材に白人作家ヘミングウェイの中にアフリカ文化や先住民文化の痕跡を見つけ、彼を混血化しようと試み、今後ヘミングウェイをマッチョな白人男性作家と単純に論じるとは言えなくなるだろうと断言している。

包容力に富んだキューバの民衆文化への著者の並々ならぬ情熱を感じさせる、異色のキューバ文化論。

(桜井 敏浩)